

# 夢 と 現 実

——“Young Goodman Brown” から——

上 田 みどり

## 序

Nathaniel Hawthorne [1804-1864] の短篇の中でも最高傑作といわれている“Young Goodman Brown” (1835) に描かれる森への旅の解釈は、夢か現実か、解釈の恣意性を読者に与え、常にホーソーンの作品研究の関心を集めている。拙論では主人公 Goodman Brown が何のため森へ出かけなければならなかったのか、またその意味は何だったのか、そしてそれは夢であったか、現実であったかを曖昧なままにしたホーソーンの意図を考察したいと思う。

### 1. 恋愛から結婚の現実

その名が示すとおり、Goodman Brown はよきピューリタン社会の一員であった。そして社会制度の習慣に従って結婚という集団主義の一形態を選んだ。ところが、結婚3カ月目であるにもかかわらず、社会通念上考えれば奇妙なことに Young Goodman Brown は一人で旅にでかけようとする。夕暮れ時の出かける前、新妻らしく夫の不在を案じる妻 Faith に、Goodman Brown は、‘...What, my sweet, pretty wife, dost thou doubt me already, and we but three months married!’ と、3カ月にしかなら

ないのにもう自分を疑っているとして、彼女を咎める。そこで彼女の方は 'Then, God bless you!' '...and may you find all well, when you come back.'<sup>(2)</sup> と答える。その答えは一見、素直な妻の振る舞いを反映しているようではあるが、一方で、旅から帰った時に Goodman が元通りでない可能性があるという、先の不吉な予感を含み、Faith がこれからおこるであろう暗い未来を見通していることを示唆している。すなわち、新婚3か月というむしろ恋愛感情のさめやらぬ延長線上から Faith はすでに降りて、現実を見極めていようなのである。

一方 Goodman Brown の方は個人主義的理想を追っている。そして恋愛対象であるはずの Faith は、彼の理想の体現者となっている。例えば、出かけながら最悪の事態を想像する場面で、彼は妻について '...Well, she's a blessed angel on earth; and after this one night, I'll cling to her skirts and follow her to Heaven.'<sup>(3)</sup> と考える。Goodman Brown は自己の中の影の部分、これから起こる 'as if a dream had warned her what work is to be done...'<sup>(4)</sup> という予感が Faith によって、きれいにぬぐい去られ、理想の国、神の場所へ彼女を通して昇る自分を描いている。それは Faith の背後に神をみているからである。つまり Goodman Brown は結婚という現実を身を置きながら、結婚そのものの意味や重要性を考えるとなく、その彼方に理想を追い、理想的自己を夢見しているだけである。それは結婚を、妻 Faith を、そして現実を捨て去ろうとする行為でもあり、Goodman Brown は非現実的で不可能な夢を追っていると言うこともできる。森にでかける目的を明らかにしない Goodman Brown にはこうし

---

(1) テキストは Nathaniel Hawthorne, *Mosses from an Old Manse*, The Centenary Edition of the Works of the Works of Nathaniel Hawthorne X (Ohio State University Press, 1974) を使用した。本文引用はすべてこの版からである。

(2) *ibid.*, p. 74.

(3) *ibid.*, p. 75.

(4) *ibid.*, p. 75.

た心理的背景が窺われ結婚という現実認識が曖昧である。

## 2. 森で試される信仰

では Goodman Brown の信仰はどのように試され、くずされていくのかを調べてみたい。Goodman Brown の信仰は、長い間ピューリタンの信仰が守り続けられた家系、そして近隣のコミュニティという社会で培われたと言ってもよい。

森の入口あたりでは Goodman Brown は、次の例文に示されるように先祖に対して絶対的に信頼を置いている。

‘My father never went into the woods on such an errand, nor his father before him. We have been a race of honest men and good Christians, since the days of the martyrs. And shall I be the first of the name of Brown that ever took this path, and kept<sup>(5)</sup>’

上記の例のように Goodman Brown は落伍者であると自己評価している。なぜならこうした ‘such an errand’ に象徴される、一種あやしげな森への集会へ、Goodman Brown の父親・祖父は参加したことがないと、彼は知らされているのだから、その行動を実行に移した自分は、敬虔な一族にはふさわしくない人間だと、この時点では思っている。信仰深い先祖に比べ、自分を劣ら思っていた Goodman Brown は、この体験を Faith に支えられて生き抜くことで、先祖と同じ信仰にかえろうとしており、そういう意味で、彼の信仰破壊につながる森への旅そのものも、彼の家系や社会という外的要因がきっかけになっているとみなせるのである。故に Goodman Brown は森に行き、そこでさらに罪深い悪事を重ねていた先祖の実態を知って、より大きなタブーに陥ってゆくことから Goodman Brown の信仰はまわりから崩されてゆくといつてよい。

(5) *ibid.*, pp. 76-77.

さらに Goodman Brown を、奥深い森へとかりたてるものに、次々と知らされる先祖の実態（悪業）がある。特に集会の最後に現れる ‘the sable form’<sup>(6)</sup> の長い演説が Goodman Brown の将来の信仰不信を決定する。

‘This night it shall be granted you to know their secret deeds; how hoarybearded elders of the church have whispered wanton words to the young maids of their households; how many a woman, eager for widow’s weeds, has given her husband a drink at bed-time, and let him sleep his last sleep in her bosom;....By the sympathy of your human hearts for sin, ye shall scent out all the places—whether in church, bed-chamber, street, field, or forest—where crime has been committed, and shall exult to behold the whole earth one stain of guilt, one mighty blood-spot. Far more than this! It shall be yours to penetrate, in every bosom the deep mystery of sin, the fountain of all wicked arts, and which inexhaustibly supplies more evil impulses than human power—than my power, at its utmost!—can make manifest in deeds. And now, my children, look upon each other.’<sup>(7)</sup>

上記の例文にあるように、Goodman Brown はここで「先祖の秘密の行いを知る許しが与えられている」。それは具体的に、教会の長老の破廉恥な言葉だったり、既婚女性や息子達の思いの中での殺人であったり、人間の邪悪な言葉の数々を示している。それと同時にホーソーンの関心事でもある、罪を冒す同胞の共感をとりあげ、Goodman Brown に説得を図る。

このように主人公の意識の中に語り手の一意専心ともいえる勢いによっ

(6) 暗黒の人物（形）と訳せるだろうが、明瞭でない暗闇の暗号として捉えられると思う。『緋文字』（1850）の墓碑にもこの表現が象徴的に使われる。

(7) Nathaniel Hawthorne, p. 87.

て、Goodman Brown はいつも神に全幅の信頼をおく信仰に向かおうとする自分の意向を妨げられ、森から出ることが出来ないでいる事は、スーザン・マニング (Susan Manning) も指摘しているとおりである<sup>(8)</sup>。しかし、彼の信仰が、自分が信じていたものに対する幻滅によって崩壊していつているようにみえても、その幻滅をひきおこす真の原因は Goodman Brown の内部に潜んでいる知の衝動のようにみえる。実際上記の例文に示している、‘the deep mystery of sin’, ‘the fountain of all wicked arts’, ‘evil impulses’, といったような推進的原動力は、森に入った時に、最初に出会った男の持っている蛇のような杖を連想させ、蛇が象徴する原罪を引き起こした《知》が、Goodman Brown を罪へ導く好奇心の本質を暗示しているように思えるからである。つまりエデンの園で最初の間人間が冒した《知》へのおごりが、ここでは彼の目覚めのモチーフとして使われている。

明らかにされない Goodman Brown の森の集会参加目的は、彼自身の信仰を試す場として使われているのだが、そこで試される信仰とはピューリタンの視野の狭いものだった。『ピューリタンの偏狭な視野』の中でスーザン・マニング (Susan Manning) が、「Goodman Brown の見方は、いじりな程の抑えがたい欲望が極限に達し、必要とされる自由に導かれながら、サタンの誘惑を通してアダムとイヴの物語を演じている<sup>(9)</sup>」と解釈しているように、結婚という現実の集団社会、またそれを含むもう一つ輪を広げたピューリタン社会を疑いもなく信じ、それに同化することを選んだ自分、つまり森の集会参加前の自分から、《知》の負荷した今の現実の中で、揺れ動き、葛藤する自分へと変化する姿が、この小品によって描き出されている。

(8) Susan Manning, *The Puritan Provincial: Scottish and American Literature in the Nineteenth Century*, (Cambridge, Cambridge University Press 1990) p. 100.

(9) *ibid.*, p. 101.

### 3. 理想の崩壊

Goodman Brown の典型的ピューリタン信者としての教育は幼い頃、Goody Cloyse から習い培われた教養問答にはじまる。従って森に出かけるまでの Goodman Brown にとって、彼女は理想的女性のモデルであった。それなのにその彼女がこの森で同じ邪悪な集会目指して歩いている。その時交わされる言葉には ‘smallage, cinque-foil, wolf’s-bane, fine wheat, fat of a new-born babe’<sup>(10)</sup> といった魔女の混ぜ物料理の材料が並ぶ。模範的家庭婦人でカテキズムの指導者である Goody Cloyse が、実はそのような魔女まがいの女性であったとわかることが、Goodman Brown にとって、大きな信仰の躓きになり、女性に対する不信の始まりともなった。しかし何ととっても Goodman Brown の最大の驚きと挫折は、妻 Faith に対する信頼の崩壊である。森の集会に行かないように Goodman Brown にあれ程請うた Faith が、姿は目に入らないにもかかわらず、その集会の周辺にいるような気がしてならない。その時の Goodman Brown の苦悩は次のように描かれる。

The cry of grief, rage, and terror, was yet piercing the night, when the unhappy husband held his breath for a response. There was a scream, drowned immediately in a louder murmur of voices, fading into far-off laughter, as the dark cloud swept away, leaving the clear and silent sky above Goodman Brown. But something fluttered lightly down through the air, and caught on the branch of a tree. The young man seized it, and beheld a pink ribbon.<sup>(11)</sup>

Goodman Brown は純粋に善良な人間が存在するという自分の信仰心を

(10) Nathaniel Hawthorne, p. 79.

(11) Nathaniel Hawthorne, p. 83.

裏付けてくれる妻の返事を待っている。Faith が自分の叫びに答えてくれれば、この森の出来事が悪夢にすぎないという確認がとれたはずなのだが、聞こえるのは誰のものともされない若い女の声や群衆の囁きめいた声だけである。そこで彼の信仰（ピューリタンの全く汚れない生活を信じる）はぐらつくのだが、その崩壊を確実にしたのが、ピンクのリボンの落下である。このリボンは物語の初めて Faith がつけていたものと同じピンク色で、妻 Faith を象徴しているが、天から落ちてきたそのリボンを手を取った時、Goodman Brown は、Faith もやはり墮落した同胞の一人だったことを確認する。レヴィ氏 (Leo B. Levy) は「このことはホーソンがもはや Faith ではない Faith だといっているようだ<sup>(12)</sup>」と森の体験以後の Faith はリボンが象徴する誠実さを、そして信仰を失った Faith であって、出発時の Faith ではないと指摘する。しかし出発に際して Faith が示した不安を裏付けるように、森の体験以後は Faith も Goodman Brown も元通りではなくなっていることから、最初の場面の Faith の心の中に、すでにリボンのない Faith が隠れていたと推察できる。Goodman Brown にそのことが認識できなかっただけである。

それでは、リボンをつけた Faith の中にリボンのない Faith の心がすでに隠されていたにもかかわらず、リボンをつけた Faith と、それをなくした Faith という、彼女の対比がきわめて印象深い点はどのように解釈できるのだろうか。二人の中身は同じである可能性をほのめかしながらも、ホーソンは、Goodman Brown の森行きを止めた Faith と森の中の Faith とを全く別の人格のように描いている。これについてニナ ベイム女史 (Nina Baym) は、「だれでもがするように Goodman Brown と Faith は空想にふけたし、テキストが暗示する唯一の汚れは、人間の心

---

(12) Leo B. Levy, *Nathaniel Hawthorne Modern Critical Views*, Edited by Harold Bloom, (New York Philadelphia Chelsea House Publishers 1986), p. 124.

(13) Nina Baym, *Nathaniel Hawthorne A Study of the Short Fiction*, ed. Nancy Bunge, (New York Twayne Publishers 1993), p. 140.

のひそかな汚れ、その空想の秘密である」と説明する<sup>(13)</sup>。つまりふたりは罪の共犯者、同胞であり、理想としての Faith は、Goodman Brown の心の中にある一つの希望であり自己確立課程の自己の投影にすぎなかった。従って、Goodman Brown の現実認識の変化に伴って Faith の姿もかわってみえるのである。Faith の本質は良き妻とも悪女ともとれる曖昧さの中に残されたままである。

## 結 論

ホーソーンの他の短編“Minister’s Black Veil”<sup>(14)</sup>にもあるように、この作品において、作者ホーソーンは人間信頼の底にある暗い不信、懐疑に関心を向けている。特に人間性に対する不信、中でも女性に対する懐疑が、Faith の描写に顕著であり、それはホーソーン自身が女系家族の出で、女性を深く観察できたことによるのかもしれない。特に早熟で読書好きの姉 Elizabeth Manning Hawthorne は、謎めいた人物でありながら、一緒に作品も書いており、作家ホーソーンに多大な影響を与えたといわれる<sup>(15)</sup>。そうした実体験から、ホーソーンは人間の精神の深い所にある闇や葛藤を見抜くようになり、森の場面を単に夢としてかたづけられない深みのあるホーソーン独自の世界を作りだした。ホーソーン自身が自分の作品を“psychological romance”だと言っているように、この物語も彼の個人体験に裏打ちされた、個人の内面の奥深い底で起きる物語を扱っている。

(14) “The Minister’s Black Veil” (1836)

(15) Margaret B. Moore, “Elizabeth Manning Hawthorne: Nathaniel’s Enigmatic Sister” と題しての記事による。(Nathaniel Hawthorne Review Volume 20, Number 1 Spring 1994), pp. 1-9.